

# 「海事のたのしみ」と古代史 — 遣唐使の廃止と清盛の評価

MATRIX 投稿  
2012.10 岡本 洋

## 1. はじめに

今回の MTS 第 114 回例会<海事の楽しみ>における村上馨氏発表の「平清盛にみる時代の流れ」において、私は標題に掲げた 2 点についてフロアよりコメントをのべた。その要旨は、

- ① 「遣唐使の廃止」に関しては、その理由についての定説のほか、新羅、唐の海商の活躍を考える必要がある事。
- ② 「清盛の評価」については、これも定説のほか、「源頼朝は清盛の政策を大いに参考にした事」に注目すべき、としたものであった。

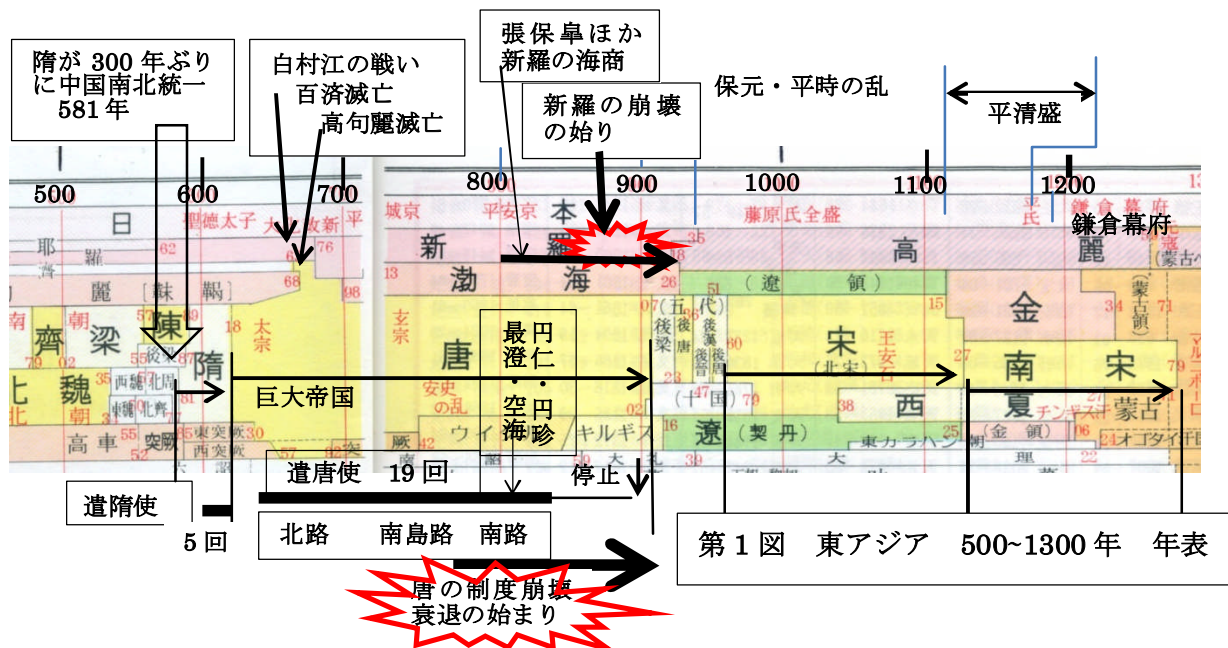
以下はその趣旨に解説を添えて簡単にまとめたものである。

## 2. 海事の楽しみ と古代史

現在、東シナ海は、日中間の EEZ とガス田開発、漁業問題から発展して領土問題で緊張状態にあり、大いに関心が高まっている。本稿では、西暦約 600 年から 1200 年頃までの「東シナ海」をめぐる問題を考える。この時代の「黄海、東シナ海」を囲む東アジア諸国・王朝の興亡は、非常に目まぐるしく、各王朝内の確執と、その各国の上位に君臨する中国各王朝の中華思想に元づく支配・干渉との攻防を核に、各国政府内の革新と保守、独立と協調の派閥抗争など等が複雑に絡み合いドラマチックに展開してゆく。我が国もこの渦の中に巻き込まれてゆく。「白村江の戦い」はその代表例にすぎない。これらは、「東シナ海をめぐる大きな古代史」のドラマとして捉える事が出来て、非常に興味をそそられる。その中で、ここでは主として海事に注目する。

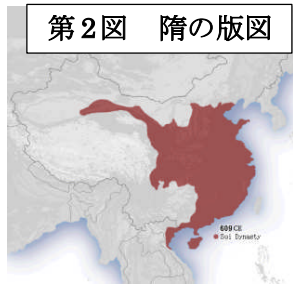
## 3. 遣隋使、遣唐使 —— 第 1 図 年表参照

標題に関連する事項中心に、西暦 500~1300 年間の年表を第 1 図を作成した。



#### 4. アジア諸国の興亡と遣隋使・遣唐使の開始

4.1 隋建国・581年—卑弥呼(~248?没)の時代の「魏、蜀、呉」の三国志の時代(220~265頃)以来多くの国により乱れていた中国を約300年ぶりに全土統一して**大国家・隋(581~618)**が誕生した。始祖・文帝は、新たに律令制度、科挙を実施し大いに改革を打ち出したと言われる。然し、僅か37年でこの国は滅びるのだが、

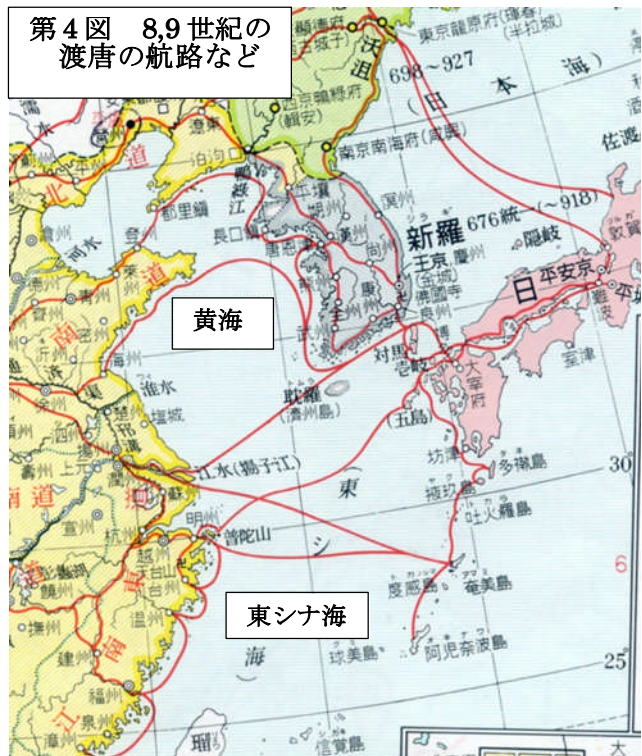


4.2 遣隋使派遣—我が倭国・推古朝廷は、その建国19年後にあたる

西暦600年に第1回の遣隋使を派遣。派遣は全部で600、607、608、608~09\*、610、614年(異説あり)。我が倭国は巨大国家の成立、進んだ律令制度の整備などに、単純に学ぼうとしたのか(\*608~09年には留学する学問僧が派遣されている)、遙か離れた島国に係らず巨大国家の圧力に危機感を感じ友好を繋ごうとしたのか、どのような背景での派遣なのか、又東シナ海を具体的にどのようにして渡ったのか、どのような成果があったのか、計5回の派遣にのぼるが、疑問は晴れない。渡海した船、航海など海事関連を含めて興味あるテーマである。隋はその後、東の軍事国家・高句麗の討伐に失敗した疲弊もあって、間もなく建国後37年間で滅亡し、次に史上**の巨大国家・唐**が建国される。



4.3 唐(618~907)の建国と遣唐使—唐は、隋よりも更に大きく現在の新生・中国を凌駕する様な巨大版図(第3図)。この唐により東方にあって長く続いた**百濟(346~663)**、**高句麗(BC37~668)**ともに滅亡させられる。我が国の遣唐使の派遣は建国12年後、最後の遣隋使から16年後のから始まり19回行われ、第20回目が問題の派遣だが、遣唐使に任命された菅原道真自身の建議が認められて中止となったものである。派遣した年は次のとおり(出発—帰国年)



- ①630—632/ ②653—654/
- ③654—655/ ④659—661/ ⑤665—667/ ⑥667—668/ ⑦669—?/
- ⑧702—704/ ⑨717—718/ ⑩733—735/ ⑪746 停止/ ⑫752—754/
- ⑬759—761/ ⑭761 船体破損・停止/ ⑮762 渡航失敗・停止/
- ⑯777—778/ ⑰779—781/ ⑱804—806(最澄・空海他)/ ⑲838—839(円仁)/
- ⑳894 停止

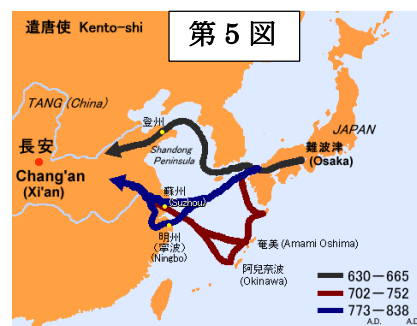
#### 4.4 航路、航海—第 4、5 図参照

- ①、②、③、④、⑤ 630~665 年 北路
- ⑧、⑨、⑩、⑪、⑫ 702~752 年 南島路(奄美など)
- ?、⑯、⑰、⑱ 773~839 年 南路(中央)

我が倭国が唐と新羅の連合軍に「白村江の戦い(663 年)」に大敗してから以後、倭国と新羅の関係は冷却する。14

年後の 676 年に新羅は朝鮮半島を統一支配するのだが、その年、新羅王子等が倭国に入貢してきている。その間、

ロバやオウムを日本に献上したりしているが、その態度がどうも無礼だったとされ、新羅討伐の議まで起こるようになり悪化している。そのような背景から、以後の黄海沿岸周り航路は現実的でなかったらしい。



#### 5. 遣唐使の廃止、894 年 —— 第 1 図参照

遣唐使に指名された菅原道真自身の建言によって廃止が決定されるが、その理由は、

##### 5.1 廃止理由

- ①唐国内の騒乱、国力衰退、②新羅と我が国との関係悪化、③航海の危険性、④財政上の困難 とされているのが定説。

然し、以上 4 点では必ずしも実態を十分に説明するものではない。

- ⑤海商(かいしょう)の活躍により、その利用の方が有利。いまだに僧侶入唐・渡航の多くの需要があるが、朝廷自身が「遣唐使船という公船」で経費と危険を冒すよりも新羅海商等の組織力を利用が有利との民活利用の判断があったとされる。渡海僧には、勅許をえてすべてに経費が支給されるために、かなりの負担となる。

##### 5.2 廃止に対する学説 —— ①~④とすれば、大学入試は正解となるとされるが、⑤の説は

- ④「日本朝廷の公的使節の廃止から貴族の私貿易の展開説」との通説となっている様である。これに対し更に最近の研究では、次のものがある。
- ⑤「朝廷管理下の民活」(山内晋次「中国海商と王朝国家」)——公船による公的使節は停止されて海商による交易となっても、大宰府の管理による朝廷の管理下にありつつ、盛んな交易活動がおこなわれたことが明らかになっている。また、使節の派遣は廃止されたが、代わって僧侶などによって使節の代替えが行われていた。

#### 6. 新羅海商(しらぎかいしょう)の活躍

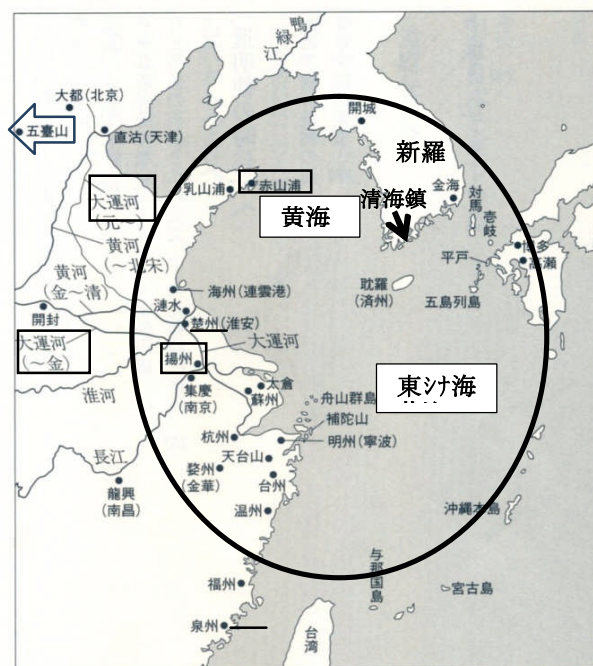
6.1 新羅の混乱・衰退(第 1 図) — 新羅(356 年建国~503 年国号を新羅に)は、唐に協力して百済、高句麗を滅ぼして 676 年朝鮮半島を統一した。唐の影響を大きく受けて律令制度の採用による改革を進めたが、旧貴族・新興貴族・地方豪族が王権をめぐる抗争を続けるようになってゆく。745 年頃から新羅では飢饉や疫病が発生し、社会が疲弊していった。755 年には新羅王のもとへ、飢えのため、自分の股の肉を切り取って父親に食べさせた男の話が伝わるほどだった。このときに、日本の九州北部をはじめ、日本へ亡命し、帰化した新羅の民が多数いた。天武天皇(元大海人皇子)は新羅系との説があるが、新羅融和政策をとるが、以後新羅滅亡まで多くの難民が日本に帰化した。新羅からの朝貢を受け難民を受け入れる等する一方で先方の不遜な態度もあり新羅討伐が議論されたこともある。交流は

色々と山谷があり複雑である。

**6.2 張保臯**—この時期の新羅海商として張保臯(ちょんぼご、790~846?)、別名張宝幸がいる。新羅、唐、日本にまたがる海上勢力を築いた人物。海運交易(奴隸貿易禁圧ともいう)を司る清海鎮(韓国南端部の全羅南道韓莞島群)大使として兵1万人を授けられた。その勢力は黄海・東シナ海を制覇し東アジア一帯の海上王国に発展した。因みに、韓国海軍には彼の名を冠した「チャンボゴ級潜水艦」全9隻があり、韓国海の記念日は彼を顕彰するもの。

800年代前半は彼が、黄海・東シナ海に活躍した時代である。主に揚州以北にその支配組織をもっていた。遣唐使船と渡海僧は多くの援助をうけている。

第6図において、揚州、楚州、赤山浦などが新羅海商の主要な勢力下にあったらしい。



第6図 9世紀の海商・張保臯の活域  
榎本渉氏の付図を加工作成 2012. 岡本 洋

**6.3 9世紀は東シナ海に海商の活躍が始まる画期である。**—8世紀の時点では、まだ東シナ海に海商の往来はなかった。政治権力によって派遣された遣唐使船という臨時便こそあったものの、恒常的に海を往来する、海を生活の基盤にした人々は存在しない(と榎本氏はいち切っている)。然し、9世紀になると、大宰府鴻臚館址からまとまった中国陶磁器片の出土が見られるようになる。これは中国以外では世界最大の出土量である。もともと鴻臚館は外国の国家使節の滞在施設だが、9世紀には海商もここに収容され、取引がおこなわれた。**まさに9世紀は海商の出現**によって、日本列島の外国製品受容は一変した(榎本渉)。遣唐使船はこのような東シナ海を恒常的に往来する海商活躍の時代には必要がなくなった、とされる。ならば、その時 我が国の海商はいなかったのか、東シナ海に活躍の場を求めようとした先駆者はいなかったのか。既に5世紀、高句麗第19代の広開土王の時代に既に倭国の襲撃が石碑に記録されている。後の倭寇の史実からするとこの時代は日本海事の沈黙の時代だったのだろうか。今後の研究テーマとなる。

#### 6.4 海商と渡海僧との関わり事例

円仁の場合——3.3)の実質最後の遣唐使船@838—839年、に円仁(794-864)がいる。2回の失敗の後の3回目の渡海ながら揚子江河口の渚に乗り上げ船は全壊の到着。彼は短期留学僧であったが、これでは期間不十分と悟り、唐皇帝の勅許を得られないまま不法滞在。9年半にわたる修行を果たす。これを可能にしたのは張保臯ほか新羅の海商の唐における組織活動の援助による。そして彼ら船で帰国。円仁とは、

◆円仁(794~864)—天台宗開祖最澄(766~822)に師事し、後に入唐(上記)して帰国。第3代

天台座主となり慈覚大師ともいう。博多出港時から帰国までの9年半の修行・旅行記録である「入唐求法巡礼行記につとうぐほうじゅんれいこうき」はエド・ウィン・ライシャワー(元米駐日大使)の英訳と研究で世界的に有名。彼は円仁の宗教上の活躍を高く評価。

### 6.5 円珍の場合・遣唐使船廃止以後の状態

◆**円珍(814~891)**—空海の甥で天台宗の僧。天台寺門宗の宗祖、智證大師(ちしょうだいし)。延暦寺第5代座主、園城寺(三井寺)をたまわる。

円珍の入唐は最後の遣唐使船**⑩838—839**以後のもので、従って、もともと新羅海商の船で入唐・帰国(853~858)したケース。これ以後日本の権力者や寺院は必要に応じて、海商の船を通して随時僧侶を派遣できるようになった。東シ海は日本と中国唐との間にはだかる壁から道路にかわっていった。

## 7. 清盛の時代

平家の時代 —— ……おごれる人も久しからず ただ春の夜の夢のごとし  
たけき者もついに滅びぬ 偏に風の前の塵に同じ……「平家物語」より

7.1 平家の時代——平家の時代を清盛が太政大臣になって権力の頂点に達した時から平家滅亡までとすると、それは僅か18年。確かに、あまりにもはかなく短い。

西暦	平家 主要事項
1156	保元の乱
1158	清盛 大宰大貳(袖の湊 造成)1160に辞任
1159	平治の乱 ↓
1167	清盛 太政大臣 ↓
1173	大輪田の泊・経ヶ島 (1161から工事開始)
1179	後白河法皇幽閉、重盛死亡
1180	福原遷都、東大寺消失、源頼朝挙兵
1181	清盛死亡 ↓
1185	壇ノ浦の戦い、平氏滅亡
1192	鎌倉幕府 開府
1199	頼朝死亡
1219	実朝(3代将軍) 暗殺、源氏将軍絶える

第1表 平家の主要年表

建国/滅亡	国名	継続年数
220~265	魏	45年間
581~618	隋	37
618~907	唐	289
1167~1185	平家	18
676~935	新羅	259
1192~1219	鎌倉	27(源氏3代)
1219~1333	鎌倉	114(北条)

第2表 主要王権の継続年数

1)他の王権などとの比較(上記の2つの表参照)——確かに平家の政権の期間は身近18年に過ぎないが、とは言え、平家を倒して鎌倉幕府を樹立した源氏として僅か3代27年で北条にそのトップの座を譲っていることを考えると以て瞑すべしか。

2)東シ海と平家——1158年に清盛は大宰府の実質的責任者・大宰大貳(ださいのだいに)に就任する。保元の乱に続く平時の乱で勝利し、実質平家の時代を迎える前年のことである。清盛は、直ちに博多に日本最初の人口の港、「袖の湊」の造成開始、日宋貿易の改革に着手。1160年これを辞任した1年後1161年には、早くも次の「大輪田の泊」の「経ヶ島」造成に着手する早業を見せる。さてこの1158年だが、最後の遣隋使・遣唐使と続いた中国王朝への最後の出発以来、すでに320年以上も経過している。中国では、唐も滅び、混乱の時代をへて



第7図 12世紀南宋

成立した宋も 167 年の治世の後に、北部の金と南宋に分裂していた。

3)南宋(1127~1279)の時代となっていた。南宋は上海の南杭州湾の奥の杭州を都とした。一方朝鮮半島でも新羅は 130 年も前に滅んで、高麗(918~1392、1200 ごろから元に服属)の時代になっていた。宋の時代においても、我が国朝廷の勅許をえて僧侶が入宋している。

12 世紀にはいる密航して入宋する僧が増えるが、清盛が太政大臣になった 1167 年には後年東大寺再建などで活躍する重源(1121~1206)が入宋している。この間海商が引き続き活躍している様である。日本の玄関湊は博多港(那の津)であり、大宰府の管理下で鴻臚館が海商にも使用されていた。日宋貿易は宋が能動的で日本は寧ろ受動的な形でつづいていた。

## 7.2 清盛の海事における功績——

清盛の海事における功績として、ここでは次の項目を挙げる。

- ①日宋貿易の促進、 ②阿彌陀港を博多から大輪田の泊(神戸)へ、
- ③港湾航路の改修—博多(袖の湊)、音戸の瀬戸開削、大輪田の泊改修(経ガ島築造)、
- ④瀬戸内航路の確立—航路の安全(海賊討伐など)などのシステム

7.3 日宋貿易——日宋貿易は南宋・高麗・日本の三国間貿易の形で行われ、日本の湊は日本海の敦賀、と博多であった。清盛清盛の父忠盛も早くから日宋貿易の魅力に着目して、敦賀支配の越前守、博多・神崎荘園統括者として推進、巨利を得ていたというが、清盛は、従来の日宋貿易に対する姿勢を積極姿勢に転換した。日本からは、「金・銀・真珠・硫黄・水銀・工芸品」、宋からは「絹・陶磁器・薬品・書物・経典・銅銭」などがあつた。村上氏の発表で詳しいのでここでは、音戸の瀬戸開削、博多(袖の湊)を中心にのべる。

## 8. 瀬戸内航路と音戸の瀬戸

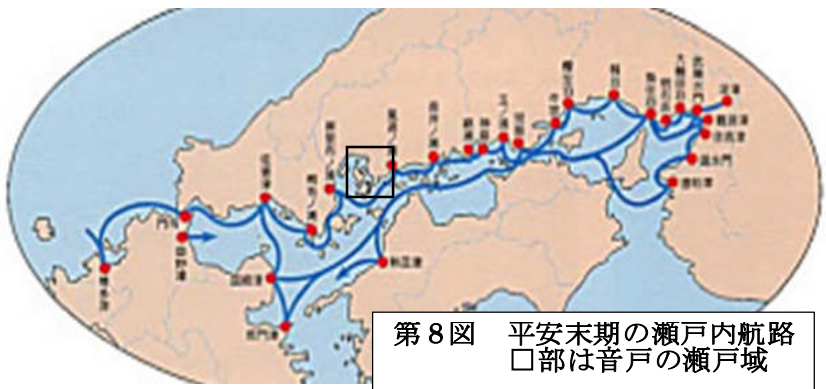
### 8.1 平安末期の瀬戸内航路

——遣唐使、遣新羅使の航路は、「難波津から武庫の浦、明石の浦、藤江の浦、多麻の浦、長井の浦、風速の浦、長門の浦、麻里布の浦、大島の

鳴戸、熊毛の浦、佐婆津、分間の浦、筑紫館」へと続く諸港が開かれた。

天平年間(729~748)には、行基(668~748)により、ほぼ一日航程の間隔で、「室生泊(室津)、韓泊(飾磨)、魚住泊(明石・魚住)、大輪田泊(兵庫)、河尻泊(神崎)」の 5 泊(撰播 5 泊)が開かれ、古代瀬戸内海航路の基盤となった。

律令制においては、貢納物の積み出しは国津に限られていたが、平安時代になり荘園制が発達するとともに、瀬戸内海航路は公租の運搬や荘園年貢の輸送の動脈として、また、大陸との交易の主要ルートとしてなお一層の繁栄を見た



第 8 図 平安末期の瀬戸内航路  
□部は音戸の瀬戸域



第 9 図 宮島、音戸の瀬戸域図  
図示は清盛宮島詣で推定航路、□部は音戸の瀬戸域

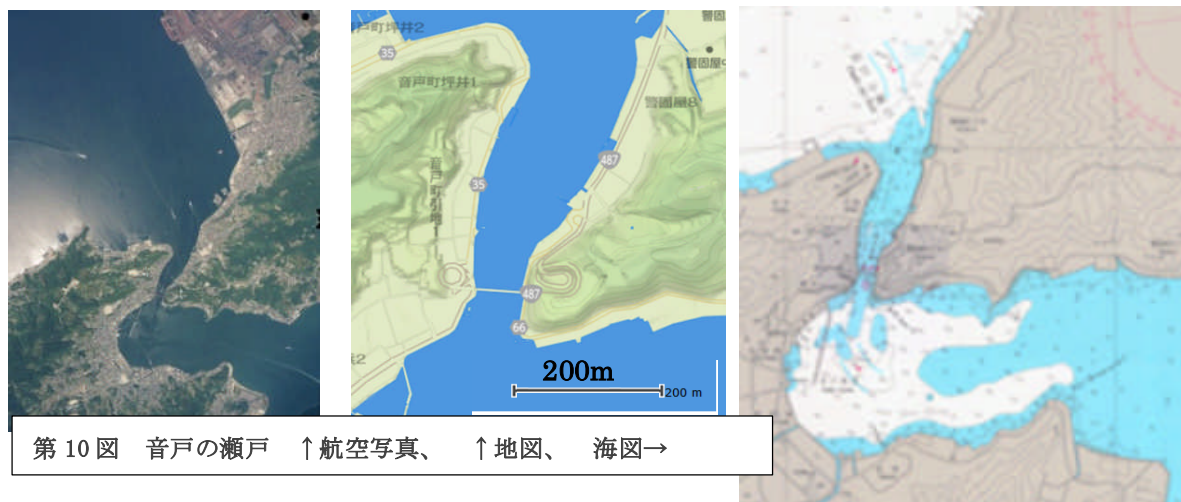
が、それに伴って海賊も横行するようになった。このころの主要な港は、室津、韓泊、魚住、大輪田、河尻、方上（片上）、那ノ津（福岡）、牛窓、児島、敷名、長井浦、風早、熟田津などです(資料引用)。宋船の航行は山陽道よりもメインである。

8.2 「音戸の瀬戸」——呉市の市街地南部。平清盛は日宋貿易のために、従来の宋船のターミナル那ノ津(博多)をより都に近い大輪田泊(兵庫)に移すために、大輪田の泊の改修整備として人工島・経ヶ島を築くなど、瀬戸内海航路を整備を進めた。清盛はその他、牛窓、敷名の泊（沼隈町）の港の整備や音戸の瀬戸の開削も行ったと伝えられている。「音戸の瀬戸」緒元は下記第3表の通り。

第3表 ⇒

音戸の瀬戸	
開削時期	1167年
海峡幅	約90m
可航幅	約60m
最大潮流	約7ノット
通行量	約700隻

但し、近年の地質調査ではもともと船の航行に十分な水深があったとされ、「地続き or 浅瀬」だったという証拠はないという事から、清盛の工事説—『芸藩通史』『続西遊記』—は事実とは考えられていない。第8図を見ると瀬戸内航路はこの音戸の瀬戸を通過していない。「清盛、宋船の瀬戸内航路、音戸の瀬戸」について現時点では明確にはできない。然し、1160年の高倉帝と清盛の宮島詣では、この航路を通ったと考えられている。

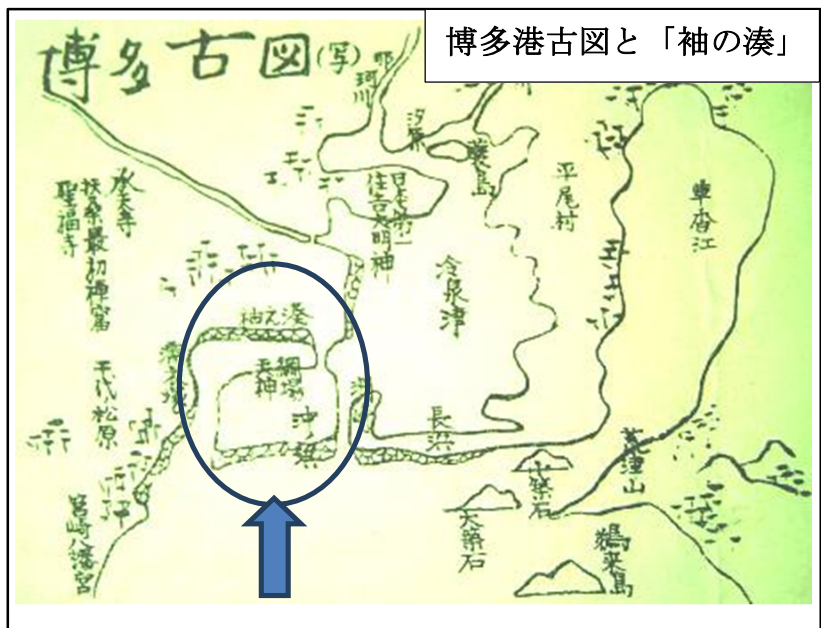


第10図 音戸の瀬戸 ↑航空写真、↑地図、海図→

8.3 袖の湊(そでのみなと)——博多港は古名は「那の津（なのつ）」。金印で有名な「倭奴国（わのなこく）王」の「奴（な）」だと言われている。「日本書紀」にも「那津（なのつ）」という記載がみられる。7.1 2)のように清盛は1158年に大宰大貳に任じられて博多に来ると、直ちに日宋貿易促進策の一つとして自費で人工の港造成に着手したと言われるのが、この「袖の湊」である。清盛は続いて1161年から大輪田の泊の「経ヶ島」の造成を開始するのだから、既に博多で港湾建設の know how を身に付けていたということになる。現在、「袖の湊」は、すべて現在の博多の市街の下にうもれて僅かにそれを示す石碑と古地図のみとなっているのは、大輪田の泊の「経ヶ島」と同じであるのは、興味深い。



福岡市営地下鉄、中洲川端駅からほど近い鏡天満宮



第 11 図「袖の湊」石碑と古図

## 9. 清盛の評価

清盛の歴史上の評価は極めて悪かった。長く日本史上の悪役として評価され続けた平清盛。『平家物語』をはじめとする軍記物語や源氏の武家政権の発展を描く歴史書では、清盛に否定的な評価がくだされるのが常であったといえる。が、近年の研究では、プラス評価が増えているし、大河ドラマの放映によりブームでもある。

### 1) 日宋貿易の促進の経済効果と航路・港湾に係る先駆的な取り組み(経済遺産を生む)

### 2) 宋銭輸入による貨幣経済推進(経済効果をあげたが、結果はハイパーインフレで失敗とみられる)

など等と、坂本竜馬に擬して評価する面もある。然し、海事関係を除けば、彼の描いた「新しい国のかたち」を目指しての前向きな姿勢が共感をよんでいると言え、手法は強引・過激、結果は悲劇的というしかない。

清盛の歴史的な最大の功績は、逆説的評価ではあるが、対朝廷政策の見本と教訓を清盛に続く頼朝の鎌倉幕府以後江戸幕府にいたる武家政治に与えたことであるといわれる(高橋昌明)。清盛は位を登りつめると、京を離れて福原に住まいして朝廷とは間接的に関わる手法をとる。頼朝も家康も深くこの教訓をうけついただと言えよう。

それにしても、海事関係における彼の発想、実行力には敬意を払うものである。

(おわり)



## 参考文献

1. 「沖縄の海」—自然・環境から潜水艦戦まで 岡本 洋 2010 海友フォーラム第11回懇談会
2. 「中国の海洋進出と日米の対応（その1、2）」岡本 洋 2012 MATRIX No. 76, 77
3. 「世界史年表・地図」 亀井高孝ほか編 吉川弘文館 2006年
4. 「白村江の戦いの謎に挑戦」 岡本 洋 2009.7 MTS 第102回例会講演
5. 「世界の海戦から見えるもの文明の潮流から海事まで」岡本 洋 2008.7 MTS第99回例会講演
6. 「僧侶と海商たちの東シナ海」選書日本中世史 榎本 渉 2010.10 講談社
7. 「王朝への挑戦 平の清盛」 高橋昌明 2011.11 平凡社 別冊太陽 日本の心190
8. 「9世紀における東アジア海域と海商—徐公直と徐公佑」 山崎覚士 2007.2  
人文研究 大阪市立大研究紀要第58巻
9. 「奈良平安期の日本とアジア」 山内晋次 2003 吉川弘文館
10. 「中国海商と王朝国家」 山内晋次 前掲図書第2部第2章
11. 博多港の「みなと文化」—古代から中世へ、「袖の湊」の構築 榎田 裕一  
その他、博多「袖の湊」 Wikipedia、など
12. 「袖の湊」 <http://www003.upp.so-net.ne.jp/heike/yukari/kyusyu/sode.htm>
13. 大輪田の泊 Wikioedia 他、神戸市、神戸港資料
14. 「瀬戸内海の家賊」村上武吉の戦い 山内 譲 2005.2 講談社
15. 「海賊と海城」 山内 譲 1997.6 平凡社
16. 「平家の群像」物語から史実へ」 高橋昌明 2009.11 岩波新書1212